「全国スーパーグローバルハイスクール
課題研究発表会2017　SGH甲子園」

概要

会場　関西学院大学西宮上ケ原（うえがはら）キャンパス
日時　2017年3月19日
プログラム及び参加校・チーム数
- プレゼンテーション／25校25チーム
- ポスター発表／77校209チーム
- グループディスカッション／1テーマ6人

テーマ1「日本が外国人労働者として移民を受け入れるにあたっての課題と解決策について」
テーマ2「日本の学校を9月入学化することの課題と解決策について」
テーマ3「日本における選挙権の18歳以上への引き下げについての課題と投票率を上げるための解決策について」

SPECIAL REPORT
特別リポート

「SGH甲子園 2017」開催！
全国から84校が参加し、情熱をかけた研究の成果を発表

2017年3月、関西学院大学において
「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2017　SGH甲子園」が開催された。
全国のSGH校及びSGHアソシエイト校84校が参加し、
課題研究の成果をプレゼンテーションやポスターで発表した。
今回は、審査員や参観者の投票による審査が行われ、各校の発表は熱を帯びるものとなった。
大盛況のうちに幕を閉じた発表会の模様をリポートする。

高校の研究発表会としては日本最大規模のイベント

2017年3月19日、阪神甲子園球場で春の選抜高校野球大会が開幕したその日に、兵庫県西宮市の関西学院大学において、「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会2017　SGH甲子園」（以下、SGH甲子園）が開催された。16年3月に開かれた「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール校・SGHアソシエイト校課題研究発表会」（参加校27校）が好評だったことを受け、今年度は規模を拡大。参加校を全国から募集したところ、84校約200チームの申し込みがあり、高校が参加する研究発表会としては日本最大規模のイベントとなった。

SGH甲子園は、文部科学省「大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）」の一環でもある。同事業は、学力の3要素の「主体性等」をより適切に評価するための評価尺度・基準の開発と、その成果の普及などを目的としており、その指定大学には代表大学の関西学院大学のほか、8大学が名を連ねる。今年度は、「課題研究を通じて、学びに向かう力

を高校現場や大学入試でどのように評価するのか」という知見を得る試みとして、関西学院大学と指定大学の大阪大学、大阪教育大学、そして早稲田大学の大学教員が審査員として参加し、研究発表の評価を行って、上位チームを表彰することとした。

開会式では、関西学院大学の村田治学長が、発表に臨む高校生に次のようにエールを送った。

「今後20年間で、今ある職業の半数以上がなくなると言われ、生産年齢人口が減少するなど、社会環境は大きく変わっていきます。だからこそ、学び続ける力、問題を自ら発見する力、そして、社会や世界をどのように変えたいのか、自分自身の人生をどう生きていくのかという価値観、世界観を持つことが求められます。それらを身につけるための方法の1つが、皆さんが取り組んできた課題研究だと言えます。今日はこれまでの研究成果を存分に発揮してください」

25校がしのぎを削ったプレゼンテーション

課題研究発表は、プレゼンテーションとポスター発表、3つのテーマを討論するグループディスカッションで実施された。

プレゼンテーションには25校25チームが参加。持ち時間は1チーム30分間（うち10分間は審査員による質疑応答と講評）で、英語と日本語のいずれかで行われた。

英語プレゼンテーション部門で優秀賞を受賞した兵庫県・神戸市立葺合（ふきあい）高校2年の吉井佳弥（かや）さんは、「Textile-Waste」と題し、衣服の安価なリサイクルに関する研究を発表（**写真1**）。その内容は、日本では年間約20億着の衣服が処分されるが、リサイクルされるのはそのうち約15％に過ぎず、廃棄量を減らすために新しい形態のリメイクショップを提案するというものだった。審査員からは「アンケートの結果をもっと活用すればよかった」「一番重要なポイントはどこかをはっきりさせた方がよかった」といった厳しい指摘もあったが、それも研究レベルの高さからくる、今後の期待の表れだったといえる。

「質疑応答では、自分でももう少しだと感じていた点を指摘され、慌てしまいました。経済学の先生からはマーケティングについて、社会学の先生からは調査手法についてのアドバイスをいただいたので、今後、データを精査して研究を深め、将来はリメイクの考え方を社会に広く普及させる活動をしたいと思っています」（吉井さん）

プレゼンテーション
25校25チーム参加

写真1　神戸市立葺合高校の吉井佳弥さんは、教室いっぱいの参観者と4人の審査員を前に、衣服の無駄を減らすことに焦点をあてたリメイクショップを提案。自校とスウェーデンの高校生、世界各国の人にアンケート調査を行うなどして、研究を進めた過程も発表した。

葺合高校のほかにも、塩分の低い「すんき漬け」に着目し、高血圧者の多いアメリカで普及させる方法を提案した兵庫県立伊丹（いたみ）高校、グローバル社会で活躍するための「高校生のためのルーブリック」を提案した京都府・京都市立堀川高校、世界の肥満問題の現状と解決策を提案した大阪府・私立高槻中学校・高校など、今日的な課題とユニークな着眼点を持った研究が発表された。

高校生らしい新鮮な発想が垣間見えたポスター発表

77校209チームが参加したポスター発表では、1チームが10分間の発表と5分間の質疑応答を計4回行った。優秀賞は審査員と参観者の投票によって決まるが、参観者がどのポスターの発表に行くかは自由である

＊プロフィールは2017年3月時点のものです

ため、各チームとも、より多くの人に見てもらおうと、自作のポスターや実験道具を活用しながら、身ぶり手ぶりを交え熱心に発表していた。

発表校の1つである茨城県立土浦第一高校Bチームは「簡易発電機を発展途上国へ」と題し、電気普及率が低く、ゴミ問題を抱える、ハイチやミャンマーといった国のために、ペットボトルや釘などの廃材から作製できる簡易発電機を提案した（**写真2**）。

「テーマはすぐに決まりましたが、発電用のプロペラの強度と重量のバランスを取ることが難しく、実験段階で試行錯誤を繰り返しました。全国規模の発表会に参加するのは初めてでしたが、今日は発表を重ねるごとに、自分たちの表現がうまくなっていくのを実感しました」

また、ポスター部門優秀賞に選ばれた東京都・私立早稲田大学高等学院Bチームは、地方都市における多文化共生について、実際に滋賀県甲賀市に滞在して調査するなど、フィールドワークを重ね、ドイツの事例との比較研究を行った。

プレゼンテーションと同様に、ポスター発表でも専門的な質疑応答がなされており、生徒にとっては専門家の意見を聞けるまたとない機会になったと、プレゼンテーション1チーム、ポスター発表3チームが参加した兵庫県・国立神戸大学附属中等教育学校の森田育司先生は語る。

「本校は、卒業研究として課題研究に取り組みますが、学外の方に見ていただく機会や他校の生徒との交流は実に貴重なものです。生徒たちは専門的なアドバイスや多様な意見に刺激を受け、新たな研究意欲が湧いてきたようです。他校の発表では、地域密着の身近なテーマから、海外研修で得た課題意識を発展させたテーマまでと幅広く、独自の切り口で研究されていたのが印象的でした。提案も大人には思いつかないような新鮮かつ大胆さに驚くとともに、わくわくさせられました」

写真2　茨城県立土浦第一高校Bチームは、廃材から作製できる簡易発電機を提案。実際に作った発電機を手に、実演をしながら発表した。

ポスター発表　77校209チーム参加

写真3　石川県立金沢泉丘高校Bチームは、日本の食糧廃棄問題に着目し、消費者に届かない「規格外野菜」をビジネスに活用する方法を提案。

表現力・協働性が問われたグループディスカッション

グループディスカッションは、3つのテーマが設定され、1テーマにつき6人のメンバーで、ディスカッション45分間、課題解決のプレゼンテーション10分間、講評5分間で行われた。なお、ディスカッションの45分間では、冒頭に司会・書記・タイムキーパー・発表者など役割を迅速に決めることも求められた。

メンバーは事前に、各自の主張を400字程度にまとめて共有していたが、実際に会って話をするのはこの日が初めて。そのため、開始15分前に会場にメンバー全員が集まると、互いに積極的に声をかけ、冗談を言い合うなど、ディスカッションがしやすい雰囲気づくりに努めていた。

この日の3つめのテーマは、「日本における選挙権の18歳以上への引き下げについての課題と投票率を上げるための解決策について」。立ち見が出るほどの大勢の観客が見守る中、グループディスカッションが始まった（**写真4**）。メンバーは自己紹介を済ませると、1、2分間で役割分担を決め、議論に入った。

まず司会に促され、メンバー一人ひとりが、テーマに対する意見と、「学校で主権者教育やメディアリテラシー教育を徹底する」「海外の事例を紹介し、政治を身近に感じさせる」「住民票のない下宿先からも投票できる制度を整備する」などの解決策を提案した。その後、司会を中心にプレ

ゼンテーションに向けた課題解決策の絞り込みが行われた。政治参加への意識が高い若者には投票しやすい制度改革を実現すること、意識の低い若者に対しては選挙に対する教育を充実させ、SNSなどのソーシャルメディアを活用して政治を身近に感じさせることなどに集約した解決策について、発表者が10分間のプレゼンテーションを行い、グループディスカッションは終了した。講評では、「活発な議論の中に、各自の個性が生きていた」と賛辞もあったが、「最後は議論が散発的だった」「課題の構造化がうまくいっていなかった」といった意見も出された。

ディスカッションに参加した北海道・私立札幌聖心女子学院中学校・高校2年の桐山晴（はれ）さんはこう語る。

「同じ高校生でも、環境が異なり、学んできた内容が違うと、議論の進め方や前提知識も違っていることが分かり、その中で皆が納得できる解決策を探すことの難しさを感じました。そうした難しい議論の中でも、自分が持っている力を出し切れた充実感があり、1時間の中で自分が大きく成長できたと思います」

写真4　6人のメンバーの出身地は、北海道、岐阜県、愛知県、京都府、岡山県、福岡県と異なり、この日が初対面。開始前のわずかな時間に交流し、ディスカッションに臨んだ。皆、ディスカッションの経験はあったが、初めて会った者同士で自分の意見を主張しつつも、1つの案にまとめる難しさを感じていたようだ。

結果よりもプロセスが大切となる課題研究

すべての発表が終わった後、ラウンジでは高校教員交流会、学生食堂では高校生交流会が行われた。教員交流会では主催者代表の大学教員を交えて歓談し、学生食堂では生徒たちが健闘をたたえ合った。発表した生徒たちは、研究を深める上でも、プレゼンテーション能力を高める上でも得るものが大きい1日となり、教師にとっても、普段とは異なる生徒の姿を見ることで、指導改善のヒントを得ることができたはずだ。

SGH指定校を目指す高校にとっても、得るところは大きかったようだ。兵庫県・私立神戸学院大学附属高校の森永武人（たけと）先生はこう語った。

「本校は、『総合的な学習の時間』に課題研究を行って3年目になります。私自身も、生徒の内発的な動機づけを研究テーマとしており、課題研究は学習や進路選択の意欲に直結すると考えています。今日の発表では、SGH校の研究レベルの高さに驚かされるとともに、本校の生徒にもぜひ参加させたいという思いを強くしました。今日の成果を校内で共有し、申請に向けて準備を進めていきます」

閉会式では、早稲田大学理事の恩藏（おんぞう）直人教授の講評が行われた。

「今日の発表では、身の回りの課題や実際の経験から出発したテーマが多く、フィールドワークや実験など、実際に足を運んだり手を動かしたりすることで認識を深めている点が優れていると感じました。その一方で、調査対象の選択や分析方法などのリサーチ・デザインの甘さは、今後の改善ポイントでしょう。課題研究は、結果よりもプロセスが大切です。今日の経験は皆さんのこれからの人生にとって大きな財産になったということを十分認識してください」

その後、各賞の発表が行われ、学校名が呼ばれる度に会場は大きな拍手に包まれた。最後はプレゼンテーション部門の最優秀賞を受賞した秋田県立秋田南高校、大阪府立千里高校によるエキシビションが行われてSGH甲子園は幕を閉じた。

＊プロフィールは2017年3月時点のものです